

所属・資格 国文学科・教授

申請者氏名 紅野 謙介

研究課題		日本近現代文学の生産と受容の研究
報告の概要	研究目的 および 研究概要	日本近現代文学は活字印刷による書物や新聞雑誌などの大量生産が可能な時代の到来とともにあらわれた。時期によってその発行部数も増加し、等し並みに扱うことはできないが、大量に市場に出る商品としての側面を抜きに語る事はできない。さらに文学はいわゆる「コンテンツ」として、演劇や映画などの他の表現媒体に翻訳され、その二次的な翻訳表現を通して、より多くの人々に浸透し、本体へのアクセスを増進するようにもなった。こうした生産と受容、翻訳、変形、そしてさらに再生産という増殖的なサイクルによって、近現代文学は社会の中で大きな市場価値を持つようになった。こうした近代の産業社会と文化の生産・再生産の関係を昨年ひきつづき、歴史的に考察する。
	研究の 結果	一昨年度より調査と研究を重ねてきた「教育改革」ならびに「入試改革」が国語教育にどのような影響を及ぼすかについて、前著『国語教育の危機』につづけて『国語教育 混迷する改革』という本をまとめた。さらに関連して、編著『どうする？どうなる？これからの「国語」教育』や、論文「読む」ことをめぐる闘争——名和小太郎『著作権 2.0』とテキストの複数性」、エッセイ「教科書が読めない学者たち」「国語」改革における多様性の排除——教材アンソロジーの意義」などの文章を、文芸雑誌や一般雑誌に寄稿した。総体として、大学入学共通テストに潜む問題点を明らかにするとともに、高等学校の新学習指導要領における「国語」教育の歪みや偏りを指摘し、日本における言語教育が直面している転換点を示すことができた。広い意味において産業社会の変容と文化の生産・再生産の関係を解き明かす糸口になったと考える。
	研究の 考察・ 反省	今年度は、ひきつづき国語教育問題に研究の中心を置くことになったが、『中里介山研究』もひきつづき進行させており、その成果は「三味線と「間の山節」——内田吐夢における「中国体験」の痕跡」としてまとめることができた。できれば次年度の後半にはこれまで書きためてきた論文を整理統合し、出版していきたい。
研究発表 学会名 発表テーマ 年月日/場所	研究成果物 テーマ 誌名 巻・号 発行年月日 発行所・者	<p>※この欄は、本報告書提出時点で判明している事項についてご記入ください。</p> <p>【研究成果物】 紅野謙介『国語教育 混迷する改革』（2020年1月、筑摩書房、p.p3-280） 紅野謙介「三味線と「間の山節」——内田吐夢における「中国体験」の痕跡」（坪井秀人編『戦後日本文化再考』所収、2019年10月、三人社、p.p139-168） 紅野謙介「読む」ことをめぐる闘争——名和小太郎『著作権 2.0』とテキストの複数性」（2019年10月、『思想』1147号、p.p48-60） 紅野謙介「教科書が読めない学者たち」（2019年9月、『文學界』73巻9号、p.p34-37） 紅野謙介（編著）『どうする？どうなる？これからの「国語」教育』（2019年8月、幻戯書房） 紅野謙介「国語」改革における多様性の排除——教材アンソロジーの意義」（2019年5月、『現代思想』47巻7号、p.p106-113）</p>